

平成 20 年度 文部科学省 質の高い大学教育推進プログラム (教育 GP) 選定

学問探検ゼミを核とした高大接続教育

教員間および学生生徒間の連携活動による「学びは高きに流れる」教育体制の構築



第 1 回

言語文化学 柿原武史准教授

レポーターの佐藤麻衣 (大分雄城台高校 3 年) と釘宮恵 (経済学部 3 年) です。私たちは、平成 20 年度後期の学問探検ゼミでいっしょに学びました。今回は私たち 2 人が、言語文化学や言語政策をご専門とする柿原先生の研究室を訪問して、先生の学問内容やゼミ活動についてインタビューします。



佐藤・釘宮 前半は先生のゼミや研究テーマについて、後半は先生個人のことについて質問させてください。まず初めに先生のゼミでは主にどのようなことをしていられるんですか。

柿原 ゼミ生は 6 人と少人数です。「言語に関すること」「言葉とそのまわりに関すること」をテーマにそれぞれ自分の好きなこと

を研究してもらっています。でも、経済学部なのになぜ言語なのかと疑問に感じると思うのですが、経済学部に来ると、とにかく全部経済の原理とか数式とかそういうので何でもかたづくと思ってしまう人がいるかもしれません。でも、実際には、数字データや公式とかでは説明しきれないことも世の中にはたくさんあるということを意識して勉強してもらいたいなと思ってこのゼミを運営しています。

ところで、逆に質問しますが、佐藤さんは英語が好きだそうですね。では、どうして英語を勉強しているのですか。

佐藤 中学校のときは嫌いだったんですけど、何か楽しいので。

柿原 楽しいなと思えるようになったことが何かあったのですか？

佐藤 ALT (外国語指導助手) の先生と話していて、面白く感じました。



● 経済学部
地域システム学科
言語文化学
柿原武史准教授

プロフィール

1974 年、大阪生まれ。

2006 年、大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。博士 (言語文化学)。2008 年より現職。担当授業は異文化間コミュニケーション論、総合英語など。主な研究テーマはスペイン語圏における少数言語を巡る言語政策。趣味は水泳、旅行、合唱。

柿原 そういう人がゼミ生でいてくれると嬉しいのですけど(笑)。僕のゼミ生はだいたい英語は嫌いな人が多いんです。そういう人にも興味を持って取り組んでもらえるような内容を扱っています。例えば、皆さんは理由もわからず英語を勉強していませんか。佐藤さんのように好きになれた人はいいけども、そうじゃない人もたくさんいます。そういう人も英語は勉強しなければいけない。多くの人は、「なんとなく英語は大事そうだから」という程度の意識で勉強しているのだと思います。それが一体なぜなのか、どうして英語であって中国語やスペイン語、ベトナム語ではないのでしょうか？そういうことを考えて欲しいのです。

私のゼミ生には、そういうテーマで勉強しようという人もいるし、別府のように留学生のたくさんいる地区でどんなことが起きているのかを調べたいと言っているゼミ生もいます。また、方言について調べたいという人もいるし、言葉に関係することなら何でもテーマになります。

やりたいことが好きなだけできる 大学の外国語

佐藤 高校と大学の英語の違いについて教えてください。

柿原 英語に限らず、高校までの勉強はとにかく教科書があって、学校でここまで勉強しますよってということがだいたい決まっていて、それでみんなも先生を信じて一生懸命ついて行くという感じだと思います。そうして高校までで基礎はできたものとして大学に入ってくるわけだから、ここから

先の可能性は無限なわけです。やりたければどんどんできるし、やりたくなければ別にしなくてもいい。そこが高校と大学の違うところです。

英語に関して言えば、誰も日本で読んだ人がいない全く新しい文献を読んだりすることもできますし、留学をめざして実践的な勉強をすることもできます。本当にやりたければいくらかでも勉強できる、これが大学の英語です。高校までは学習内容が決まっているし、必ず先生がだす質問には正解があります。例えばテストをして、高校だったら○か×、たまに△があるかもしれませんが。点数がきちんと付きます。それに対し大学の英語だと、そういう部分もあるけども、正解などないこともあるのです。例えば、先生の解釈とあなたの解釈が異なる場合があっても全然問題ありません。ひょっとしたら先生が間違っているかもしれないのです。誰も読んだことのない文献を読む場合などは、模範解答なんかありません。先生と学生とが対等に議論をしながら作っていくのが大学の授業なのではないでしょうか。



佐藤 研究テーマの言語政策について詳しく教えてください。

柿原 詳しくしゃべっちゃうと時間がなくなると思います (笑)。例えば、さっき言ったようになぜ日本で英語を勉強しているのか？これも一つの言語政策なのです。学校で勉強する科目に英語が入っている、誰かが決めたわけです。

ところで、今私たちは普通に言葉を使って話が通じています。これはどうしてでしょう。僕は大阪の出身です。釘宮さんはどこの出身？

釘宮 大分です。

柿原 大分ですか。佐藤さんは？

佐藤 福岡です。

柿原 福岡から引っ越してきたら、大分の人と、言葉が違ったりして驚いたりしたでしょう。でも、ちょっと方言が違うくらいでも話していることは通じ合いますよね。僕がしゃべっていることもわかるでしょう？こういう状況は日本語があるから成立するわけですね。でも現在使われているような日本語ができたのは、実はたかだか百何十年前のことといわれているのです。明治時代に、日本という国を作ろうってことで、そのときに言葉をどうするか、学校でちゃんと教えてみんなが同じような言葉をしゃべれるようにしようって、こういう政策をしていったその結果、いま私たちは話が通じるわけだし、テレビを見たり新聞読んだりできているのです。これも言語政策の一例なのです。

私たちはいま日本にいと日本語が通じるのは当然みたいだに思っていますが、国に

よっては、ひとつの国の中で4つも5つも、極端な場合、20以上もの異なる言語が話されているところがあって、そういうところにいると言語ってなんだろうと考える機会も多いし、学校で勉強する言語と家で使っている言語が違っていたりするようなこともあるのです。どうして学校で使う言語と家で話す言語が異なるのだろうと疑問に感じている人たちもたくさんいます。これもやっぱり政策の結果なのです。こういうことを調べていくのが僕のテーマです。

僕の研究対象はスペインなのですが、地域によって独自の言語があって、そういった地方言語が公用語になっていたりします。そういう場所では学校で二つの言語、スペイン語とその地域言語を使って勉強しているのです。世界では複数の言語が同じ空間に存在している場合がたくさんあります。日本みたいに1つの言語だけしか学校や役所やマスコミで使われていないのは例外的なのです。このような話が面白いな！と思ったら、ぜひ、将来僕のゼミにきてください。



佐藤 柿原先生の担当されている科目の「異文化間コミュニケーション論」ではどのようなことを勉強するのですか。

柿原 一つだけ具体的な例を挙げてみます。いまから、簡単な絵を描いてもらいます。お互いの絵を見ずに描いてください。絵が下手とか上手いとかを見るのではありませんから安心して下さい。目がくりっとして

いて、首が長くて、足が8本ある動物を描いてください。

釘宮 あの、空想のですか…。

柿原 それは知りません(笑)。自分が思うものを描いてください。簡単でいいですよ。

釘宮 おかしくなってきた(笑)。

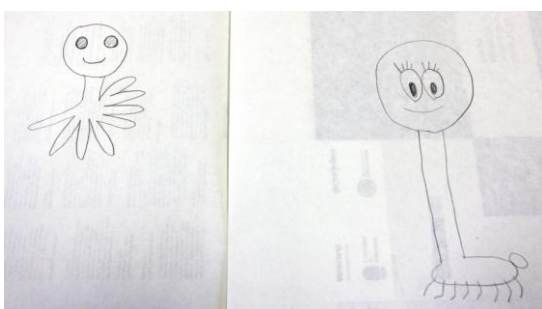
柿原 おかしいのでいいよ。

佐藤 口はあるんですか？手はありますか。

釘宮 首が長い…おかしくなってきたんですけど。何でもいいんですか。

同じ言葉を使っても 全然違うものが出てくる

柿原 何でもいいですよ。今言った3つの条件が入っていれば、あとは好きに描いて下さい。どんなの描けた？ちょっと見せて。



ちょうどいいのを描いてくれたね。可愛いね。今僕は言葉を使って説明したけども、二人全然違う絵を描いたよね。まあ似ているところもないとはいえないけど、二人が描いた動物の「足」は全然違うよね。これは、二人に同じ言葉で説明したのに、全然

違うふうに解釈したということです。どこに注目したかですぐに違った絵になるのです。

たぶん佐藤さんは「首が長い」という点に注目してキリンみたいになったと思います。釘宮さんは「足8本」に注目して、タコみたいになったわけです。これは実は「異文化間コミュニケーション論」のテキストに載っている例なのだけど、僕の授業でも実際にみんなに描いてもらいます。だいたいキリンみたいに描く人か、タコみたいに描く人かの2パターンに分かれますね。同じ言葉を使ってもどこに注目するかで全然違うものが出てくるでしょ。これが例えば英語と日本語のように言語が違ったら、もっと違う解釈が出てくるかもしれません。

ものごとの考え方とか世の中の見方とかってというのは言葉によらずに異なるんです。そういう違いから生じる誤解をいかに最小限におさえていくか、あるいは逆にたくさん違いがあるんだってことをわかった上で、よりよいコミュニケーションをはかっていくか、っていうのを考えるのが「異文化間コミュニケーション論」です。

それにしても、見事に違う絵を描いてくれました！異文化に暮らしているわけだから、同じ大分の人でもね、福岡生まれと大分生まれっていう違いが出たのかな？



佐藤 日本における多文化共生の現状について教えてください。

柿原 それも簡単に答えるのが難しい質問ですね (笑)。大分市内にいとあんまりわからないかもしれませんが、場所によっては、例えば大きな工場があるところなどに、以前日本から南米に渡って行った人達の子孫で日本に働きに来てる人がたくさんいます。彼らは日系人と呼ばれています。これは 1990 年頃から増えてきたのだけでも、いま場所によっては住民の 10%から 15%くらいが外国人というような町もあります。でも日本全体を平均すると外国人住民の比率は 1.6%くらいしかいないから、あまり普段意識することがありませんね。住民のほとんどが日本人で、みんな似たような格好をして、同じような食べ物食べて、同じようなことやっているとっている。でも、実は住民の 1 割以上が全然違う背景を持つ人だという町が今日本のあちこちにぼつぼつと出来てきているのです。これが将来日本中に広がっていく可能性があるのです。だから、これからの時代を担う大学生にはそうした町へ出かけて行ってみたいですね。どんな問題があって、どうやって共存しているのかを見て欲しいですね。



外国人住民が急増した当初は、地元の人たちともめたり、習慣が違ふとかルールがちゃんとわかっていないとかでいろいろ問題になったりしたけども、今それがある程度落ち着いて新たな段階に入ってきているところです。今、一番大きな問題は、そういう外国にルーツを持つ人たちの子どもたちが学校に行けないとか、学校に行っても全然ついていけないという問題です。



日本は義務教育だけど、あれは誰の義務かわかりますか？親が子供に学校に行かせなければいけないという義務なのです。ところが今の日本の制度では、外国人にはその義務はないのです。日本の学校に来たければ来ていいですよというのが現行の制度なのです。だから、その外国人の人たちの子どもが日本の学校になかなか行けなかったり、行ったとしてもそこで特別に何か補助をしてくれるわけでもないで、学校に通うのが厳しくなるのです。確かに通訳の人が付いてくれたり、いろいろと助けてくれたりっていう現場の対応はあります。ボランティアの人が来たりする学校もあれば、先生が一生懸命サポートしている学校もあります。でも、外国人や日本語を話せない子どもたちのケアをするっていうことに現行の日本の教育制度はきちんと対応できていないのです。

今、そういう子どもたちが急増しています。そして、制度がきちんと対応していないため、途中で学校辞めたり、イジメの対象になったり、不登校になったり、様々な問題が出てきているのです。今はまだ、絶

対数が少ないので、あまり見えていないけれど、これから先どんどん日本の中でそういう問題が増えてくると思います。だから、そういう問題があるのだということを分大の学生みんなに知ってもらって、それでね、「どげんかせんといかん」と思ってもらいたいです。多文化共生社会を生きていくために、そういった問題を意識してもらいたいです。

佐藤 先生はいつから専門分野について興味をもちはじめましたか。

柿原 僕もたぶん佐藤さんと一緒に、高校生の頃から言語っていうものにすごく興味がありました。でもそのとき学校で触れていた日本語以外の言語っていったら、やっぱり英語しかなかったから英語が好きだったんですね。そして、もうちょっと深く勉強しようとなって考えて学部を選んだのです。英語以外にスペイン語などいろいろな言語を勉強しているうちに、ある言語を話せるようになりたいとか、使えるようになったらいいなとかいう当初の目標だけではつまらないと思うようになったのです。言語は、やっぱり人間が使わなければ存在しません。だから人間と言語の関係をもっと勉強したいと思ったんです。人間も一人



じゃダメですよ。いろんな人がいるからこそ、言語って意味をなすんですよ。一人でしゃべっているのは独り言でしかありません。いろんな人とコミュニケーションをとるために言語は存在するのです。だから、社会や文化と言葉というのは切り離せないんだってことに改めて気づきました。そして、そのことにだんだん興味を持ち始めたのは、大学生の間か、大学を出て大学院に入ってからでした。もう10年以上前のことです。

高校時代に友達とした 大阪から別府までの自転車旅行

佐藤 先生の自己紹介を見ると、趣味の旅行で九州南西部の辺境駅を制覇したいとありますが、印象に残っている駅はありますか。

柿原 最近、鉄道ブームとか言われているけど、僕は子供の頃から旅行するのが好きで、中学生の時から先生によく嘘をついて学割証をもらって旅行に行ったりしていました。先生もそれを嘘だと分かっていたながら認めてくれていたんですね。いい先生でした。この近くだったら宗太郎駅っていう駅がやっぱり一番おもしろいかな。いちばん行きにくい駅と言われている宗太郎駅。

釘宮 どちら辺ですか。

柿原 大分県と宮崎県の間に峠があって、そこを越すのにね、すごく難工事があったそうです。今では停まる列車がほとんどなくて、朝1本停まったら次夕方まで停まら

ないとかそういう、めったに行けないという意味で「辺境駅」とか「秘境駅」って呼んでいます。九州には綺麗な駅がいっぱいあるから恵まれていますね。例えば、近くだったら東別府の駅がいいですね。あそこは昔からの駅舎が残っています。少し遠いですが有名などころでは門司港の駅もいいですね。あと、JR 最南端の駅、西大山駅だとかそういうところも行きました。九州は列車で旅するにはいいところですね。

佐藤 ひとりで行くのですか。



柿原 一人で行くことが多かったですが、今は妻との旅行に鉄道を組みこんだりもしているけど、嫌がられない程度にしています(笑)。昔は一人で行ったり友達で行ったりもしていました。鉄道に限らず旅行するのが好きで、高校生 2 年生の頃、僕は水泳部だったのですが、あまり大会に出られるほど強い水泳部じゃなかったの、部活の仲間たちと、大会や練習もだいたい終わった後に、夏休みの最後の 1 週間で、大阪から別府まで自転車で旅行をしたんです。和歌山から四国に渡って、徳島から高知を通って宇和島まで行ってそこからフェリーで別府に渡りました。それがすごく印象に残っています。

若いうちにできる旅行をいっぱいしてください。僕が言うのは早いかもしれないけど(笑)、年を取るとしんどい旅行ができなくなります。もうきれいなホテルに泊まっ

てのんびりするとか、移動手段も新幹線や飛行機など早い方がいいとかっていうふうになっちゃいます。若い時の苦勞は買ってでもしろとよくいわれますが、体力的に元気な時に無茶をしてね、旅行とか、旅行に限らずいろんな趣味とか何でもできることはした方がいいと思います。なんかよくわかんない話になりましたね(笑)。

バルセロナ・オリンピックから スペイン語に興味をもった

佐藤 最後に、先生は志願する大学や学部をどうやって決めたのですか。

柿原 僕は英語が好きだったから、外国語学部を選びました。でも英語はさっきも言ったように高校まででかなり勉強してきたので、それにプラス何か新しい言語を始めたいなと思ってスペイン語を選んだのですね。今高校生の時に学部を選ぶのは難しいですね。釘宮さんは、なぜ経済学部を選びましたかとか言われたらどう答えています？



釘宮 私は地元に残りたかったんです。それで大学決めて…私は逆に英語が苦手で数

学が好きだったんです。数学で受けられたので経済学部。

柿原 じゃあ好きな科目、得意科目で受験できたのと、地元でいたからって言うこと？

釘宮 はい、それです。

柿原 経済に興味があったとかは？

釘宮 それはなかったんですよ（笑）。経済って高校生にしたらくわかんないじゃないですか。でも入ってからは、なんとなくわかりだして興味をそれから持ち出したって感じです。

柿原 そうですよ。高校生の頃に学部を選ぶとか、将来の専門を選ぶとかって言うのは、難しいと思うのです。僕も、好きなこととか、得意科目が受験科目にあるといった理由で選んだといえます。あと「大分を出たくない！」とかね。そういうのも大きな要素だと思います。逆に親元離れて東京や大阪に行きたい人もいますでしょう。そういうことも学部を決める際のひとつの大きな理由になると思います。

あと僕が、なぜ英語じゃなくてスペイン語を選んだのかというと、その頃にたまたまスペインが流行っていたというのが理由なんですよ（笑）。僕が高校3年の時は1992年でした。こういう話をすると古いなーって思われるかもしれないですけど、バルセロナオリンピックやセビーリャ万博があって、日本でも新聞とかテレビとかでスペインが取りあげられていたのです。たまたま

よく話題になっていたことがきっかけに興味を持ったんですね。そこから何か縁があって、その先に進んでいって、今こうして大学教員にまでなったわけですから、最初のきっかけはたいしたことないのですが、実は大切な縁だったということになりますね。そこから先、自分が興味を持てるか持てないかっていうのは、その人の努力次第だと思います。

経済だけでなく、言語や文化が学べる 経済学部

岩瀬広報係長 最後に割り込ませてください。広報担当事務職員の岩瀬です。先生が感じるスペイン語のいちばんおもしろいところは何かでしょうか。

柿原 英語に次いで、世界の広いところで話されていますから、便利だというのがスペイン語を勉強して良かったと思う点です。それから日本語と英語しか知らなかった時よりも世界が広がったというのも大きいですね。中南米の国々に旅行や仕事で行ってみると、英語を使うだけでは見えなかった世界が見えるようになったのです。日本にいと、英語で伝わってくるニュースがほとんどで、だいたいアメリカやヨーロッパのニュースしか伝わってこない。アジアや南米のニュースと言え、たまに何か大きな事件とか事故が起きた時にしか伝わってこないのです。ところがス



ペイン語を勉強したら、中南米に興味を持つようになるし、実際行ってみる機会もあるし、行ったら…ああこんなに違う世界があったのかと気付くし、今までなんて狭い視野で世の中を見ていたんだらうって、実感したので、スペイン語をやっていてよかったなって思います。

岩瀬 今日は高校生の佐藤さんが来てくれるんですけど、高校生全体に向けてメッセージをお願いします。

柿原 経済学部に行ったら経済の勉強ができるんじゃないかって思われるかもしれないけど、僕みたいな人間もいるところですので、経済だけというのではなくていろんなことが勉強できるのが大分大学の経済学部のいいところだと思います。だから、高校生の時点では、なかなか進路を決められないと思うけど、分大ってというのは一つのおもしろい選択肢だと思います。その中でも経済学部にはいろんな人がいますので、オススメです。あとは大学に入ったら自分の専門以外にもいろんなことに首つっこんで、いろんなことを勉強して、将来への可能性を広げていってほしいなと思います。

佐藤・釘宮 今日はありがとうございました。

キャンパス・レポーターを終えて



大分雄城台高校3年 佐藤麻衣

大学のゼミの先生と初めて話すので、最初はとても緊張しましたが、去年、学問探検ゼミで一緒に勉強した大学生の先輩と2

人でインタビューしたので心強かったです。経済学部といたら、今までずっと「経済だけ」というイメージがあったけど、柿原先生のように「自分の好きなことを好きなだけ勉強できる」と知って、大学のイメージも変わりました。先生は、本当に言語が好きそうに話していて楽しかったです。昨年から大分大学の学問探検ゼミを受けてきて本当によかったです。

大分大学経済学部3年 釘宮 恵

私は、今、経済学のゼミで勉強しているのですが、その分野とは違うのでとても興味を持ちました。また高校生の佐藤さんと一緒にレポートするというので、とても緊張しましたが、普段はできないような経験ができて勉強になりました。



レポーター

大分雄城台高校3年

佐藤麻衣さん(左)

経済学部3年

釘宮恵さん(右)

インタビュー実施日 2009年9月7日